

# 『主体的・対話的で深い学び』の授業改善の実現に向けて

帯広市立柏小学校

学 級 数 21

(校長 鈴木 義秋)

## I 本校の児童の実態

本校の児童の学力の定着度は比較的高く、全国学力・学習状況調査の結果、及び第3、5学年生で実施している標準学力検査教研式CRTにおいても、ここ数年ほぼ全ての領域で全国平均を上回っており、教科や観点によっては10ポイント程度高い結果となっている。しかしながら、「関心・意欲・態度」の観点においては、例年全国平均を下回る傾向にあり、本校の大きな学校課題といえる。このことは、「知識・技能の習得」に偏った学習を積み重ねていることや、習得した知識と実生活との関わりを見出せていないことに原因があると考えられる。

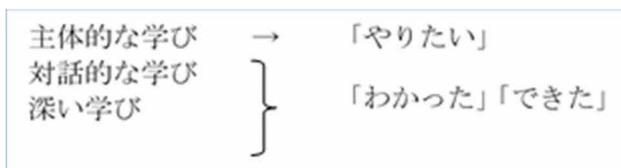
課題を解決するためには、毎時間の授業の充実を図ることが欠かせない。自らの学びを調整しながら主体的に学ぶことや、学んだ知識と実生活が有機的に結びつく深い学びが本校の児童には不可欠であり、そのことが「知識・技能の習得」だけではなく「思考力・判断力・表現力の育成」、「主体的に学びに向かう力の涵養」につながるのではないかと考える。そこで、平成30年度より研究内容を「主体的・対話的で深い学び」にむけた授業改善の実現に定め、言語活動を通じて資質・能力を育成する国語科を切り口として取り組んできた。

令和元年度実施の標準学力検査教研式CRTでは「関心・意欲・態度」において改善が見られ、国語科においては若干下回るものの全国との差が実施教科のうち最も小さい結果となった。第5学年では、2年前との比較においても約5ポイントの改善が図られ、取組の成果が見られた。そこで令和2年度より、全教科において上記の取組を推進し、組織的に学校課題の改善を進めているところである。

## II 研究主題の設定に関わって

本校では「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の実現を目指し、研究主題として「豊かに学び、認め合い、共に生きる力の育成」を掲げている。児童が自ら進んで他者と関わり合い、多くの学びを得ることを目指している。個の学びの充実を集団の学びの充実へと高めることで、多様な子どもたちを「誰一人取り残すことのない」学びの流れに取り込んでいくという学校としての強い意思の表れである。

また、「主体的・対話的で深い学び」を校内研究として取り組む上で、まずは「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」について、共同研究を深めるために全教職員でイメージを共有することが先決であると考えた。そこで、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」それぞれの場面における児童の姿やつぶやきについて日常より丁寧な見取りを行い、KJ法を用いて話し合うことから研究をスタートした。この際、共有化が図られた児童の姿は、左記が挙げられる。これをもとに副主題を～「やりたい」「わかった」「できた」を実現できる授業づくり～と設定し、研究の継続を重ねている。



本校で捉える児童の学びの姿

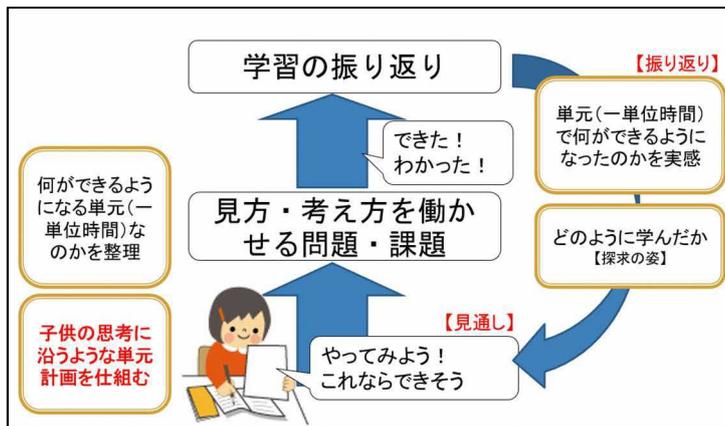
### Ⅲ 研究仮説 1 主体的な学びについて

#### 仮説 1

児童一人一人が見通しをもって取り組み、達成感を味わえるような単元を意図的に構成していくことで、「やりたい」意欲が向上するだろう。

#### 研究の視点① 自らの学びを見通し、自らの探求の姿を振り返る活動

「何を学ぶ1時間(単元)」なのかを明確にすることで、児童は見通しをもちゴールへと向かって学習に取り組むことができるようになる。その際に、単元の構成を児童の思考に沿う形で計画を立てると、見通しをもてるだけでなく、自ら課題の解決へと向かっていく原動力となる。「何を学ぶか」「どのように学んだか」ということを児童一人一人が自覚し、見通すことで、自らの学びを調整しながら、主体的な学びを展開し、「やりたい」という意欲の向上につながると思う。



仮説1に基づいた学習のイメージ

また、1単位時間の学習、あるいは単元の学習を振り返る時、はじめは、学習内容や、得た知識の振り返りに留まっていた児童も、回数を重ねることによって「どのように学んだのか」という探求の姿を振り返ることができるようになっていく。このような、学びの振り返りの積み重ねが「主体的な学び」には欠かせないと思う。

#### 研究の視点② 見方・考え方を働かせた学びとなるような問題・課題の設定

児童が「やりたい」という意欲をもち、学習に取り組む時には、そこに「どうしてだろう」、「調べてみたい」、「解決したい」と思わずにはいられない問題・課題が提示されており、自発的に資質・能力の獲得へと向かっていく。このような状況を意図的に作り出すには、その教科の「見方・考え方」を踏まえた問題の提示や、発問が必要であると思う。



児童が「見方・考え方」を必然的に働かせることができる状況を教師が作ることで、児童が既習内容や生活経験と問題とを結び付けたり、活発に対話を行ったりする場面が、これまでの授業で幾度となく展開されてきた。それが「主体的な学び」の原動力となり、一人一人の「やりたい」という意欲へとつながっていると考える。

また、このような「主体的な学び」の支えがあってこそ資質・能力の確実な習得へとつながり、深い学びの実現を図ることができると思う。本校では考える。

「見方・考え方」を働かせた学習のイメージ

参考：北海道教育大学旭川校 山中准教授の講演より

## IV 研究仮説2 対話的な学びについて

### 仮説2

どの子ども「わかった」「できた」を実現できるよう、対話や説明の場を意図的に設定し、言語活動を充実させることで学びを深めることができるだろう。

#### 研究の視点③ 自己の考えを深め、広げるために子ども同士が協働する活動

児童同士が関わりをもち、協働的な学習、対話的な学習を行うことで、一人では解決できない課題であっても、ペアやグループであれば解決へと向かえる。あるいは、個の学習において、分かったつもりになっていたことでも、ペアで対話をするすることで、理解が深まったり、新たな発見をしたりすることもある。資質・能力の「確実な」習得には対話的な学習が欠かせないと考える。

協働する活動とは単に教える、教えられるという活動をイメージしたものではなく、説明する児童も、説明を聞く児童も、その活動が自らのプラスになることを意識させる。自らの意識の中にある思考や知識をアウトプットすることで、より思考が明確になり、知識の定着にもつながる。「わかった（つもり）」から「わかった」「できた」へと確実に進むためにも、アウトプットの機会を設けることを重視して互いのプラスになるよう取り組んでいる。



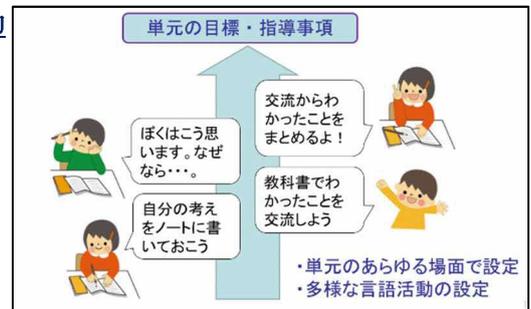
仮説2に基づいた学習イメージ

#### 研究の視点④ 思考力・判断力や表現力等を育てる言語活動

国語科に限らず、思考力・判断力・表現力等の育成において、言語活動の充実を図ることは重要である。そのため、「自分の考えを伝え合う」、「根拠をもって説明する」、「理解したことを自分の言葉で表現する」など、単元のあらゆる場面で、適切に言語活動を設定した学習計画と単元構成を心掛けている。

また、設定する言語活動として「対話する」場面が必要となる「話す」、「聞く」以外に「書く」活動にも積極的に取り組んでいる。「対話」は他者との対話の他、自己との対話、先哲との対話と多岐にわたるが、「書くこと」で「相手に伝える」、「自分自身を見つめ直す」など、対話には書く力も重要であることが、これまでの実践の積み重ねから明らかになっているところである。

学力の3つの要素をバランスよく育成をしていくためには、単元の指導計画や、年間指導計画を見通した上で、「いつ」、「なにを」指導し、どの場面でどのような方法によって評価するのかを明確にし、計画することが重要である。



単元を通して言語活動を仕組んでいく単元の構成イメージ

## V 深い学びについて

本校の研究では、「主体的な学び」と「対話的な学び」を通して「深い学び」をつくり上げていくことを意図している。その単元での「児童の深い学びの姿」をまずはイメージし、その姿を達成するためにはどのような学習活動を位置付けていけばよいのか、児童の思考に沿う形で考え単元を構

成している。単元の「ゴール」のイメージを明確にし、導入段階で児童自らがゴールへと進んでいく道筋を見通せるような手立てを準備することが必要と考える。

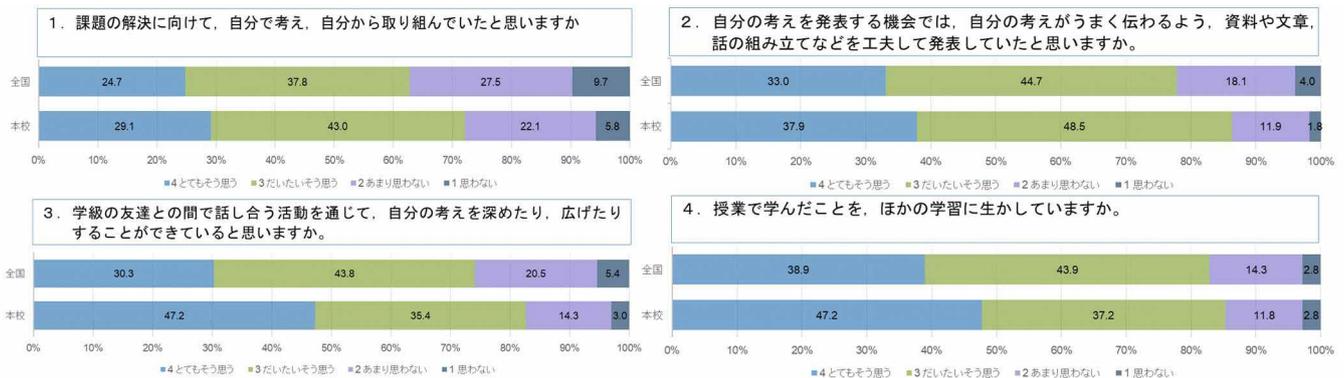
学習指導案上の指導計画は右の図のように、児童の思いが左上からスタートし、右下のゴールに向かうような形式とし、その中で、児童がどのような学習をし、何を身に付け、るか、また教師の具体的手立てや研究の仮説との関わりなどについてまとめられるようにした。学習活動の下部に「児童の深い学びの姿を配置し、単元の目標を並べることで、この単元で何を学ぶのかを把握しやすいようにした。「深い学びの姿」をしっかりと押さえておくことで、教師側にもブレがなく、児童一人一人が深い学びの実現に向かうことができるとともに、「資質・能力」の獲得につながると考えている。



### 単元の指導計画

## VI 成果と課題

「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の実現に向けて全校で取り組んできた成果の1つとして、児童アンケートの客観的な数値が挙げられる。全国学力・学習状況調査での「主体的・対話的で深い学び」に関わる児童質問紙の設問について全校児童を対象に実施したのが以下の結果である。



上段が全国、下段が本校の回答であり、いずれの設問も、肯定的な回答の割合が全国平均を上回っており取組の成果が表れていると考えられる。

また、単元の学習計画を提示することで、児童が学習への見通しをもつことができるようになったり、仲間との協働を通じて学習への安心感を高めることにつながったりしたことも大きな成果といえる。「教え込む」のではなく、児童が自ら課題を自覚し多くの気づきを得ることが多くなり、主体的な学びが展開されるようになってきている。

一方で、個に応じた丁寧な対応などについては課題も多い。平均点が高い＝「誰一人取り残すことのない学び」と捉えず、全員が資質・能力を身に付けるための深い学びができているかについて、今後さらに研鑽を深めるとともに、適切な評価の在り方について組織的に取組を推進していく。